

## 衆生としての人間：仏教における人間中心主義批判的側面

師 茂樹

現代社会において仏教の衆生を再考するにあたっては、たとえば以下のような点が課題になるように思われる。

- 新しい衆生の可能性：人工知能やロボット、人工生命など、“生物のようなもの”を人工的に作ることができるようになってきた。仏教教理上、生命そのものを人工的に作ることにはできないが、それら“生物のようなもの”が心相続のよりどころとなる可能性はあるだろう。そういった存在を衆生（生命あるもの）として認め得るのか。もし認め得るとしたら、倫理的な上下関係でもある五道（六道）などにどのように位置づけ、どのように扱うべきなのかを検討する必要がある。
- キメラの倫理的問題：人工多能性幹細胞などの研究が進んだことによって、異種の動物の器官を持つ「動物」＝キメラが作れるようになった。こういったキメラは、医学、生命科学等の発展上、“有益”な面を持っている反面、倫理的な問題も指摘されている。特に、人間の脳を持つ「動物」＝キメラを作って、そのキメラに人間的な性質（知性など）が発現した場合に、人権を認めるべきなのか、など、様々な問題が提起されている。衆生という観点から言えば、人道と畜生道をまたぐ衆生が存在する可能性がある、ということである。

本発表では、最初に、仏教の教理のなかで形成されてきた衆生という概念が、人間中心主義を相対化する側面があることを確認したい。

仏教における衆生は、五道（六道）輪廻などの世界観と密接に結びついている。言うまでもなく、仏教は、釈尊という人間が創始し、主に人間に対して教化が行われ、人間中心に教団が形成されたことを考えれば、人間中心であることは間違いない。衆生のあり方についても人間が基準となっており、天・餓鬼・地獄の衆生は容姿などが人間の延長線上にあるものとして考えられている。一方で、人道と餓鬼道、靈鷲山と靈鷲山浄土のように、同一空間にまったく異なる性質の世界が共存しており、そのどれもが同等である（どれかが主で、それ以外が従というような関係ではない）とされる。つまり、人類学者のヴィヴェイロス・デ・カストロが主張する「多世界主義」を思い起こさせるよう、人間中心ではない世界観を仏教では持っているということである。

そのような前提のうえで、上記のような問題を考えるべきではないかと考える。すなわち、何をもって衆生とするかを判定する際に、人間的な属性（感情など）を安易に導入すべきではないし、“人間の尊厳”ではなく（そのようなものが認められるならば）“衆生の尊厳”にもとづいて倫理性を判定すべきではないか、ということである。